
3 . 清

森瀬ユウ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3・清

【Nコード】

N5018P

【作者名】

森瀬ユウ

【あらすじ】

茶道部・太田優衣視点

日の長い夏でも、太陽が西に傾けば灯りの点いていない室内は自然と薄暗くなる。障子が閉ざされた和室の中には障子紙から透けるぼんやりとした日の光だけが存在していた。

当然ながら和室の中にも蛍光灯は取り付けられている。しかし部の活動中は蛍光灯の灯りは極力スイッチを入れないように決められていた。詳細な理由を尋ねたことはない。しかし、電球などというものが存在していなかった頃から続く茶道のそのままのやり方に則っているからなのだと、優衣は自分なりに解釈していた。

自然のものを、あるがままに。華美に飾るのではなく、誇張するのでもなく。そのものの良さをいかに活かして受け入れ調和させるか。

誰も何も言葉を発さない。和室の中は張り詰めた、それでいて重苦しくない静謐に満たされている。

優衣が座る畳から一畳分離れた畳の上では、同級生の一彦が帛紗を手に茶入れを磨いていた。それは「清める」という言葉で表される行為である。清めるという行為は、茶道の点前においては最も重要な要素のひとつとなっていた。綺麗な水と帛紗によって、大切な客の為に点てるお茶の道具を清浄なものへと改めるのである。

「和敬清寂」という言葉がある。それは茶の湯の大成者と言われる千利休が唱えた言葉で、お茶の精神が集約された4文字とも言えるものだ。

「和」は互いに相手を大切にし協調していくことを、「敬」は自分を取り巻く全ての人や物に対する敬いの意を、「寂」はどんな時にも動じない心を、それぞれが表していた。

そして「清」は清浄、清らかさを表している。それは目に見えるだけの清浄さだけではなく、心の中の清らかさをも意味していた。物質的な汚れは誰が見ても明らかであり、それは払ったり洗ったり

して綺麗に取り除くことが出来る。しかし、心の中はそうはいかない。基準は様々で、他人にも、自分にもはつきりとは分からない部分だ。しかし、常に自分の心が清らかであるようにする心持ちが大切なかもしれない。

すす、と、まだぎこちない所作ではあるが、一彦の握った帛紗が茶入れの上を滑る。清めるといふ行為は、ただ道具の汚れを取り払うだけでなく、点前をする人自身の心をも清めているように優衣には感じられた。美味しいお茶を客に飲んでもらいたいという、その気持ち道具となるのである。

西窓のそばに正座して一彦の点前を見ていた部長の和樹が、黙ってすうっと障子を引いた。さすがに室内が暗いと感じられたのだろうか。すると夕陽と呼ばれるにはまだ少し早い太陽が、障子の隙間から和室の中にその光を差し込ませてくる。

点前をしていた一彦の、その少し俯いた顔に前髪の影が落ちた。暗くなつた瞳。それでも分かる真剣なその眼差しから、優衣は視線が外せなくなる。それは穏やかで、それでいて鋭さを隠し持ったような眼差しだった。

優衣から見た一彦は、何処までも真面目で飾り気も遊び気もない青年だった。それをどう評価するかは人それぞれだ。つまらない人間だと思ふ人もいるかもしれない。しかし優衣はそんな一彦の姿を好意的に捉えていた。

(…… 凄いなあ)

純粹にそう思う。何事にも一生懸命になれるというのはそれだけで才能だと、優衣は常々感じている。優衣はクラスの異なる一彦のことを決してよく知っているとは言えない。それでも彼の言動の端々から彼が何に対しても努力家であることが伺われた。

道具を扱う一彦の目は、真剣そのものであった。

「鈴木、ちよっと待って」

その時、黙って一彦の点前を見ていた和樹が口を開いた。動きを止め、一彦が顔を上げて和樹のほうを見る。

「今のお湯を捨てる動作なんだけど……」

そう言いながら、和樹は一彦の手前の何処が間違っていたのか、口で説明すると同時に身振り手振りでも示して見せた。一彦はもちろん、優衣も、優衣の隣に座っていた同級生の里美も彼の言葉と動きに注目した。さすがと言うべきか、それは水が流れるような自然な動作であった。

「じゃあやってみて」

説明を終えると、和樹は間違えてしまった所作をもう一度やってみるよう一彦に促した。

「はい」

そう返事をしながら、こうですか、と、一彦は教わったように動作を試みせる。先ほどの間違いは見事に正され、和樹の説明した通りの動きになっていた。

「そう。綺麗に出来るよ」

それを見て笑顔で和樹が頷くと、一彦は小さく嬉しそうに言った。
「ありがとうございます」

そして黙々と点前を続けた。抹茶が茶碗に入れられ、続いて柄杓でお湯が注がれる。茶碗を打つお湯の音が、静寂の中に響いて心地がよかった。

（ああ、いいなあ）

その様子を眺めながら、優衣は思った。一彦が告げた感謝の言葉が優衣の耳の奥に深く沈んで残っていた。その言葉は褒められたことに対するものであるのと同時に、間違いを指摘してもらえたことに対する感謝の言葉でもあった。簡単なことのように思えるが、それを口にするのは意外と難しい。自分を取り巻く全てのものに感謝の気持ちを抱けたならば、それはどんなにか素敵なことだろう。

そんなことをぼんやりと考えているうちに、一彦は薄茶を点て終えていた。客役である優衣に向かって茶碗が差し出されている。

「太田さん、どうぞ」

そう言う一彦の声でふとそのことに気が付いて、優衣は慌てて茶

碗を取りに出た。抹茶の入った茶碗と共に定座に戻った優衣は、その茶碗を左隣に座る里美との間に置いて両手を置につけた。

「お先に」

そして会釈程度に頭を下げる。茶席における関係は、点前をする主人と茶を飲む客のものだけではない。客と客の間にも関係は存在しているのだ。客同士で心を配ることも、茶室内における気持ちのいい関係を築くためには必要なことなのである。

優衣の言葉と動作に応えるようにして、里美も両手について軽く礼をした。なんだか晴れやかな気持ちになる。優衣は茶碗を持ち上げて、今度は自分の真正面にそれを置いた。そして再び頭を下げる。「お点前頂戴致します」

お茶だけではない。美味しいお茶を振舞おうという主人の気持ちをも頂くという、そうした感謝の気持ちがこの言葉には込められていた。優衣はこの言葉が好きだった。

熱い湯気をふうつと吹いて、抹茶を一口、口に含む。熱い、が、熱くないと抹茶は決して美味しくはないのだ。飲み込むと、じわりじわりと熱が体中に広がってくる。しかしそれも不快ではない。

お茶を飲みながら茶碗越しに一彦の顔を盗み見ると、彼は眩しうに目を細めていた。実際に障子の隙間から差し込む西日が眩しいのかもしれない。けれどもそれが優衣には微笑んでいるようにも困っているようにも見えて、不思議な気持ちになった。

優衣の位置からは見えない太陽に思いを馳せる。それはいつまで経っても姿かたちを捉えることの出来ない光だ。その光に照らされながら、今日も自分たちは帰路につくのだろう。

一彦に悟られるその前に、優衣は視線を落とした。

熱いうちに飲んでしまわなければ。そう思う。冷めてしまう、その前に。

優衣は茶碗に残っていた抹茶をゆっくりと飲み干した。美味しい。茶碗から顔を離すと、自然と笑みが零れた。窓の外では、太陽が夕陽へと、色を変え始めていた。

授業と授業の合間。休み時間の喧騒。蒸し暑い教室の窓は全てが開け放されているが、残念ながら風は殆ど吹いていない。白いカーテンが身動きひとつ取れずにだらりと頂垂れていた。

「あれ？ おかしいなあ」

教室の指定された席に座って、優衣が独り言を漏らした。机の中に入っている教科書やノートをすべて取り出し、1つ1つを点検するが目的のものは見つからない。カバンの中を覗いてみても、やっぱりそれは見つからない。

「何やってんの、優衣」

机やカバンの中身をひっくり返している優衣の様子を見兼ねたのか、近くの席に座っていた里美が優衣へと声を掛けた。

「英語の教科書が見つからなくて……家に忘れたみたい」

「英語って、次の授業じゃん。どうするの？」

授業が始まるまでにはまだ時間がある。しかし教科書を家に取りに戻る時間はない。優衣の家と学校の間には、電車で通わなければならないほどの距離があるのだ。教科書がなくても授業は受けられるが、教科書がなければその内容はさっぱり分からない。教員に知られたら注意されるのは必至である。

「もちろん借りてくる」

「誰に？」

「鈴木くんに借りてこようかな、って」

優衣が同じ茶道部の1年生である一彦の名を出すと、里美は興味津々な様子で尋ねた。

「優衣って、鈴木くんのこと好きなの？」

その直球過ぎる質問に、優衣は一瞬言葉を失う。しかし直ぐに抗議の声を上げた。

「何で教科書を借りるだけでそうなるの」

眉を顰めた不満そうな顔をする。好感を抱いていることは確かだが、それが恋愛感情を示す「好き」であるかどうかとなると話はまた別である。教科書を借りるだけで恋愛云々に発展してしまつては堪つたものではない。

「やだなあ、優衣、冗談冗談。そんな怖い顔しないでよ。ね？」

優衣が顔を曇らせてしまつたため、冗談のつもりで言つた里美は必死で弁解を試みる。その様子を見て、仕方ないといった風に優衣は息を吐いた。怒つていないことを示すために笑顔を見せると、里美はほつと安堵の表情を浮かべた。

「そういえば、この前佐藤くんが顔に怪我してたの知ってる？」

そしてふと思ひ出したよう話を変える。悠基は一彦のクラスメートだ。彼らは中学生の時から友人なのだという。

「佐藤くん？ ああ、そういえば」

記憶の糸を手繰ると、確かに先週あたりに頬を湿布で覆つていたような気がする。

「他校の生徒と喧嘩したらしいよ。路上で殴り合つてたんだって」
声を潜めながら里美が言つた。知らされた情報の内容に、優衣は思わず眉を顰めてしまふ。そしてつられて声を小さくした。自然と会話をする距離が近くなる。

「それ、本当？」

「隣のクラスの友達が実際に見たつて言つてたから、本当だと思う」

「そうなんだ……」

「なんかちよつと、怖いよね」

里美の話が本当であるのだとするならば、確かに怖い。優衣は暴力沙汰は見るのも聞くもの苦手だ。しかし、信じられないという気持ちしが心の何処かにあるのも確かだった。

優衣は一彦のこと以上に悠基のことをよく知らない。彼との関わりなど一彦を介して数度あるくらいであり、一対一で話をしたことは1度もなかった。明るい茶の髪にピアスと、決して真面目には見えない悠基であるが、話してみても悪い印象は受けなかった。彼の人

懐つこい笑顔が脳裏に浮かんだ。そこからは、他人を殴って傷つけることを平気とするような人間性は感じられない。

「鈴木くんは、そのこと知ってるのかなあ」

ふとそんなことを思った。どちらかといえば、一彦も喧嘩や暴力を嫌がるタイプであるように思われたからだ。

「友達なら、知ってるんじゃない？ でも、鈴木くんと佐藤くんが友達っていうのも、何だか不思議な感じがするけど」

だから里美のこの言葉にも同意してしまう。優衣から見たら、彼らは、性格も考えも全く正反対であるように感じられるのだ。何故友人関係が続いているのだろう。それとも、自分が考えている彼ら自体がそもそも全くの虚像でしかないだろうか。

「……真面目そうに見えるけど、鈴木くんも殴り合いの喧嘩とかするのかな」

続けてそんな思いが脳裏によぎったが、普段の一彦の様子からは、彼が人を殴る姿など想像も出来なかった。首を振り、優衣は自分で自分の考えを打ち消した。

「鈴木くんに限ってそれはないと思うよ」

優衣の独り言を聞いた里美もその考えを否定する。自分が一彦に抱く印象は、里美のものとそう隔たりはないらしい。

「そつえば優衣、鈴木くんに教科書借りに行くんじゃないの？ 早くしないと授業始まっちゃうよ」

「えっ？ あ、忘れてたっ」

里美の言葉を聞いて、優衣は慌てて席を立った。突然ふりだしに戻った会話。優衣はすっかり当初の目的を忘れてしまっていたのであった。

「頑張つてねー」

そう言つて笑いながら里美が手を振っている。何を頑張るんだ、とか。話を逸らして教科書のことを忘れさせたのは誰だ、とか。言い返したいことは多々あったが、教科書を借り損ねてしまったら大変だ。優衣は早足で教室を後にして一彦のクラスへと向かって歩き

出した。窓の外には広がる青空。入道雲をすり抜けて鳥が飛んでいく。

彼はどんな表情で、何と言って教科書を貸してくれるだろう。和室で見る物腰柔らかい一彦の様子を思い出し、優衣は廊下を歩く速度を速めた。

（どうしよう）

優衣は不安に押しつぶされそうな心を胸に扉の横に立っていた。その胸の前では一冊の教科書を抱えている。一彦に借りた英語の教科書だ。しかしどれだけ教室の中を見回しても一彦の姿は見当たらない。時間が経てば経つほど不安は増大するものだ。

（どうしよう……）

一彦が教室内にいないことはすでに知っている。けれどもどうすればいいのか分からなくて、優衣は再び一彦のクラスを覗き込んだ。やはり彼はいない。小さくため息を吐いたその時、背後から声が聞こえた。

「あれ、太田さん？ どうしたん？」

驚いて振り返ると、そこには悠基が立っていた。悠基の身長がいくつなのかは知らないが、どちらかというと小柄な優衣は自然と彼を見上げる形になってしまう。大きな、そう思う。

「えっと、鈴木くんを探してて……」

路上で殴り合ってたんだって。1時間ほど前に聞いた里美の言葉がよみがえり、優衣は少しだけ身体を固くした。

「ヒコ？ ヒコー」

悠基は一彦の名を呼びながら教室の中を覗き込んだ。そして数秒待った後に、

「ごめん、今いないみたい。急ぎの用？」

と言いながら、ひよこつと顔を優衣のほうへと向けてきた。真っ

直ぐに向けられるその笑顔に、優衣は身体のを抜く。

「借りてた教科書を返しに来ただけど、」

「ああ、じゃあいつ戻ってくるか分からないし、俺が返しておくよ」
優衣が目的を告げると、悠基はそう言って右の手を差し出してきた。大きな手だった。けれども優衣は素直にその手に一彦の教科書を渡すことが出来ない。

「あ、でも、自分で返したい、し」

そう言い淀んで、優衣は俯いてしまった。その様子を見て悠基は首を傾げるが、素直にその腕を引っ込める。そして心配そうに尋ねてきた。

「大丈夫？」

早く不安の原因を誰かに話して楽になってしまいたい、そう思ったのかもしれない。悠基に言ってもどうしようもないと知りながらも、優衣は口を開いた。

「実は、鈴木くんに借りた教科書にマーカーでラインを引いた上にボールペンで書き込みしちゃって」

他人の教科書ということでは初めのうちは気をつけていたのだが、時間が経つにつれ、そのことが段々と頭の中から遠ざかっていってしまったようだ。自分のものつもりで書き込んでしまったメモとアンダーライン。思い出した時はすでに時遅しとなっていた。

優衣が事情を説明すると、悠基は大丈夫だよと言って笑った。

「それで元気がなかったんだ。大丈夫だよ、そのくらいじゃヒコは怒らないよ」

何を根拠にと優衣は思ったが、しきりに悠基が大丈夫だと言うので、何だか本当に大丈夫なような気がしてきてしまった。無意識のうちに強い力になっていた両腕の力が抜けていく。

「実はね、中学生の時ヒコも俺の教科書で太田さんと同じことやってるんだよ」

「え？」

悠基の言葉に驚いて優衣が顔を上げると、彼はイタズラを決行し

ようとしている子どものような笑顔を見せた。

「鈴木くんが？」

「そう。やっぱり英語の教科書。訳とか熟語のメモが書き込んであって、まあそれは別にいいんだけど、そのメモが間違ってたんだよね」

優衣ははつとして抱えていた一彦の教科書を開いた。自分が書き込んでしまったメモが間違っていたら、更に申し訳ないことになる。そう思ったからだ。しかし何とかそれは杞憂で終わり、優衣はひとまずほつと胸を撫で下ろす。

「ヒコのメモを信じてテストで書きちゃったらさ、赤点だよ赤点。あれには参ったよ」

その時のことを思い出したのか、悠基は笑みを苦笑に変えながら話した。思いがけず耳にしたふたりのエピソードに、優衣は何だか微笑ましくなってきた。彼らの思い出話を聞くのはこれが初めてだった。こうやって笑って話せる程に仲がいいんだ、そう思った。

その時、誰かが会話に乱入してきた。

「その問題が正解でも赤点だっただろ、お前は」

優衣と悠基は同時に声のしたほうへと振り向く。するとそこには一彦が困ったような顔をして立っていた。その腕には大量のノートが抱えられている。

「ヒコ」

「鈴木くん」

一彦は優衣と悠基が立っている教室の入り口のそばまで歩いてくると、無言で悠基に向かって抱えていたノートを突き出した。反射的に悠基はそのノートを受け取る。その一彦の様子が怒っているように感じられたので、優衣は慌てて彼に頭を下げた。

「ごめんなさいっ、借りた教科書に書き込みしちゃって」

しかし一彦は優衣には不快そうな態度を一切示さなかった。

「太田さんは気にしなくていいよ」

優衣が差し出した教科書を受け取りながら浮かべた笑顔は、普段和室で見るものと同じ、やさしくて、何処か遠慮にも似た穏やかな笑顔だった。

「悪いのは佐藤だから」

ところがその直後に悠基に向けられた視線は厳しいものであった。「何自分に都合のいいように過去を捏造してんだよ。俺のせいにするな」

どうやら先ほど悠基が優衣に話して聞かせた内容に納得がいかなかったらしい。もしかしたら自分の失敗をぺらぺらと話されてしまったことが気に障ったのかもしれない。一彦は口を尖らせて文句を言った。

「何だよ、そもそも間違ったメモを書いたヒコが悪いんだろ」

すると悠基も応戦するようにしてむくれてみせた。しかし一彦も負けてはいない。

「自分でちゃんと勉強すれば気付く間違いだ。お前が悪い」

遠慮のない言葉と強めの口調。それは優衣が初めて見るふたりの姿だった。本格的な口論に発展してしまうのではないかと、優衣は内心ではらはらする。しかし、

「それに、俺はちゃんと謝ったんだからもう時候だ」

一彦のこの言葉に言い圧されて、悠基はたじたと言葉を引っ込めた。口を尖らせて小さな溜息をつく。

「ところで、これ何？」

しかし先ほどまでの強い語気は何処へ行ってしまったのか。いつも通りの語調で、悠基は一彦から手渡された大量のノートに視線を落としながら尋ねた。ノートはざっと数えて20冊以上はある。重そうだと優衣は思うが、それを持つ彼には全くそんな素振りは見られない。

「ああ、それ。先週の宿題の提出用ノート。先生に頼まれて職員室に取りに行ってたんだ」

一彦が説明すると、悠基はふーんと言ってノートを眺めた。

「分かってると思うけど、佐藤のノートはないから」

突き放すように一彦は言う。しかしそれを聞いても悠基は顔色ひとつ変えなかった。会話の内容から察するに、悠基は宿題を提出していないのだろう。そしてそのことを何とも思っていない。例えば何故提出しなかったのかと責められたとても、面倒だったからと清々しいほどに胸を張るのだろう。そんな気がした。

「で、何で俺にこれを？」

悠基が首を傾げながら一彦を見る。

「休み時間の間に全員に返しておいてもらおうと思って」

「は？」

「宿題をやらなかったんだから、それくらいしたっていいだよ」

一彦はしれつと言いつつ放った。しかし口調は平坦なものであったが、それに反して顔は笑っていた。子どもが面白いイタズラを思いついた時のような、そんな笑顔だった。その笑顔がつい先ほど見たばかりの悠基の笑顔と重なった。

（ああ。鈴木くんも、こうやって笑うんだ）

ふと、そんなことを思った。いつもの笑顔。目を細め口角をほんの少し上げただけの微笑み。よく考えてみれば当たり前のことなのに、何故、自分が見ていた姿が全てであるような気がしていたのだろう。

（わたし、部活での鈴木くんしか知らない）

本当に、友達なんだなあ。そう思う。そうでなければ、遠慮ない態度をとった後にあんな風には笑えはしないだろう。

そういえば、前にも。優衣は記憶の糸を辿る。

それは放課後、初めて一彦と悠基、里美と4人で駅へと歩いた日のことだ。悠基の言葉に、彼は冗談めいた言葉で応えて笑っていた。一彦は常に物腰が柔らかで人当たりがよかった。しかしそれは何処か遠慮がちで、他人と距離を保ち続けようとしているようにも感じられた。いつだって誰かの視線を気にして生きているような。

（だけど、きっと許してるんだ。佐藤くんの前では）

彼の前だけでは、誰かが定義する鈴木一彦であり続けようとしてもいい、と。だから一彦は悠基と一緒にいるのかもしれない。誰かが誰かと一緒にいることの、その理由は様々だ。性格が合うとか合わないとか、タイプが正反対だとか。他人から見た評価など、一体なんの意味があるのだろうか。

見ると、一彦の笑顔に応えるようにして悠基も人懐っこい笑顔で笑っている。どうしても、優衣には彼が他人を拳で殴るような人物だとは思えなかった。けれども彼の左頬には絆創膏が貼られている。それが里美の言っていた喧嘩の傷跡なのかもしれない。たえそうだとしても、

（きつと、筋が通ってるんだ）

笑うのも、怒るのも。理由があつて、それは彼の中ではきちんと筋が通っていることなのだろう。優衣から見た悠基は常に堂々としている。臆したところがひとつもない。そんな悠基の態度が優衣にそう思わせた。

首の向きだけを変えて廊下の窓の外を眺める。四角く切り取られた青の上を鮮やかな雲が這っていた。しかしそれは決して真っ白ではない。日の光に照らされて輝くところがあると思えば、影となつて灰色に淀むものもある。色とりどりのグラデーションが、そこそ絵の具を混ぜ合わせたかのように視界を彩っていた。

ふわりと、風が優衣の髪を揺らして首元をくすぐった。開け放された窓から、緩やかながらも風が入り込んでいた。風があるのとないのとは体感温度が大きく違ってくる。心と身体が、急に軽くなったような気がした。

「それじゃあ、鈴木くん、佐藤くん、わたしは教室に戻るね。ありがとう」

優衣が声を掛けると、一彦と悠基は同時に顔を向けて口々に言った。

「こちらこそ。また部活で」

「もう帰っちゃうの?」

その言葉がそれぞれに彼らしく感じられて、優衣は思わずくすりと笑ってしまった。

「次、移動教室なんだ。またね」

笑いながらそう言うと、またねと応えてふたりも笑った。今まで優衣が見てきたふたりの姿だ。それでも今は、異なる彼らの姿を知っている。そしてこれから、どれだけ知ることが出来るだろう。

肩の前で軽く手を振って、優衣はその場を後にした。直後に一度だけ振り向くと、一彦と悠基が肩を並べて教室の中に入っていく姿が目映った。

教室に戻ると待ちかまえていたかのように里美が声を掛けてきた。

「優衣ー、おかえり」

優衣は里美の座る席へと近づきながらそれに応える。

「ただいま」

「どうだった？ どうだった？」

興味津々な様子で尋ねてくる里美に、優衣は思わず苦笑してしまう。それでも、彼女なりに心配してくれているのだろうと思う。

「大丈夫だった。怒ってないみたい。佐藤くんもフォローしてくれたし」

よく考えるとあれがフォローだったのかどうかは大いに疑問だが、結果的に見ると悠基に救われたと言っても過言ではないだろう。

「佐藤くん？」

突然現れた悠基の名前に、里美が目丸くする。

「うん、最初鈴木くんがなくて……佐藤くんと話してたの」

「どうだった？」

「どうだった、って……全然怖くなかったよ。佐藤くんは、佐藤くんだよ」

その言葉は、里美に対するものであると同時に、自分に言い聞かせるためのものでもあった。笑い合う2人の姿が脳裏に浮かんだ。窓の外には見慣れた青空が広がっている。しかしそれは先ほど見

た空ではない。雲は形を変えて、色を変え、漂い続ける。移ろう青は何処までも深く遠くて、それでも確かにそこに存在していた。

優衣は口を開いた。

「里美、わたしね、」

（ふたりのことが淒く気になるみたい）

好きか嫌いかと訊かれたら、優衣はきつと迷わずに好きだと言える。けれども、恋とか愛とか、今はまだそんな言葉で言い表されるものではないのだろう。

羨ましいな、と思う。彼らのことが。知りたいな、と思う。彼らのことを。

そのためにはまず、自分のことを見つめ直さなければならないのかもしれない。大切に思う誰かのことを残さずに捉えられるように、常に心を澄み渡らせておかなければならない。それはきつと大変なことだろう。覚悟だつて必要だ。それでもきつと、

（2人はそれをしてるんだ）

確信はない。しかし何故だかそんな気がしてならなかった。

「何？」

優衣が言葉を途中で止めて黙ってしまったので、里美は怪訝そうな顔をして続きを促した。しかし、しばし言葉を探した後 ゆっくりと首を振りながら優衣は言った。

「うつん、何でもない」

その言葉に里美が拗ねたような声を出した。

「えー、何、何。気になる」

「ごめんね、ちゃんと言葉で言えるようになったら言うから」

そう、今は、まだ。この思いは胸に抱いていよう。いつか自分のものとして消化出来たら、言葉で言い表せるようになったら。目の前にいる友人に伝えよう。

「だから、それまでは待つてて」

優衣がそう説明すると、里美は少し考えた後、こくりと首を縦に振った。

「わかった。待ってるよ」

「……ありがとう」

自分のことを信じて待つてくれるという、里美への感謝の気持ちが届けばいい。出会ってまだ数ヶ月の友人。彼女のこと、もつと知りたいと思う。

「そろそろ移動しよっか」

荷物を持って席から立ち上がりながら里美が言った。間もなく次の授業が始まる時間となっていた。クラスメイトたちはすでに授業に備えて移動を開始している。

「うん、荷物持ってくる」

優衣は授業に必要な道具を取りに自分の席へと向かった。

吹き始めた風がカーテンをふわりと動かす。悲しげに項垂れていたはずのそれは、今は心地よさそうに黙って風に揺られていた。

「お待たせ」

荷物を持って、優衣は里美の横に並んだ。

「行こう」

そして同時に歩き出す。教室にはもう殆ど誰も残っていないかったが、暑さに淀みそうな空気を追い出すために、窓を閉めるのはやめにした。

教室を出る優衣と里美の背後では、再び空が姿を変えていた。夏の気配が、色を濃くして輝いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5018p/>

3．清

2010年12月14日21時25分発行